

『クリジェス』における“cuer”について

植 田 裕 志

クレチヤン・ド・トロワの韻文ロマンス『クリジェス』¹ (*Cligès*, 12世紀末フランス) では、互いの思いを知らぬままに遠く離れて暮らした主人公クリジェスとフェニスとが久方ぶりの再会を果たした時、それぞれが遠回しに自分の“cuer”（「心」、「心臓」にあたる古仏語、現代語では“cœur”）について語り、「私の“cuer”は私のもとを離れてあなたのところへ行っていた」、というような言い回しをしばらく交わした後によりやく互いの思いを確かめ合うことになる²。

恋愛の感情・心理を“cuer”（ラテン語では“cor”）を使って表現することは、クレチヤンの時代にあってはめずらしいことではない。トルバドゥールなどの中世抒情詩³やアンドレーアース・カペルラーヌスの恋愛指南書⁴でもあたりまえのことであり、ウルガータ聖書にも見られる⁵。またクレチヤン作品より先に成立し流布していた古代ものロマンスのひとつ『エネアス物語』 (*Enéas*, 12世紀半ば) に登場する乙女ラヴィーヌの台詞こそフェニスの手本ともいえるものである⁶。クレチヤンは慣用的語法や文学的伝統に従いながらその表現にさらに工夫を凝らしたということになる。そしてクレチヤン以後、いわゆる中世アレゴリー文学の伝統は、ついに15世紀半ばのルネ・ダンジューの『愛に燃えた心の書』 (*Le Livre du Cœur d'amour épris*) を生み出すことになる。この夢物語では“cuer”がその名も“Cuer”と呼ばれる騎士の姿で登場し、旅をするのである⁷。

さてこのクリジェスとフェニスの会話、“cuer”を「こころ」として日本語に訳したとして、現代の日本人も、多少回りくどさを感じることはあっても二人の言葉を理解するのに困ることはないだろう。おそらく現代の日本語・日本文化がすでに明治以来、欧米の言語・文化から大きな影響を受けているがゆえに。では、もし『万葉集』の歌人たちがその訳を耳にすることができればどうであったろう。日本語でも『万葉集』の時代から「こころ」という語を使って恋が語られている。『万葉集』の歌人たちにとっては「こころ」について語るクリジェスやフェニスや語り手のコトバはときに意味不明なもの、あるいは違和感を感じるようなものであったりしないだろうか。

J. レイコフたちに始まる認知意味論の立場からすれば、「こころ」に限らず、広く恋愛などの感情や心理、出来事について語るコトバも、先にたとえば恋愛という既知の感情や事象があってそれをなにかのメタファーによって表現するのではなくて、ある種の枠組みをもとにし

たコトバを使うことによってはじめて未知なる感情や事象がそれと認知される、ということになる。たとえば、恋愛についてであれば、「二人はどうしてもひきつけられてしまう」という表現には「恋は物理的な力である」という概念メタファーがもとになっており、「二人の仲は健全である」という表現は「恋は病人である」という概念メタファーがもとになっているというように⁸。

こうした概念メタファーのもとになっているのが、この地球で生きている人間の身体であると考えられるがゆえに、概念メタファーには一方では言語や文化を超えた普遍的なものもあれば、言語や文化によって異なる個別的なものもありうる。ハンガリー人のゾルターン・ケヴェチェシュ Z. Kövecses などは感情表現に関するメタファーについて研究を進めている⁹。

本稿は恋愛感情・心理の多様な表現方法を対象とするものではない。そうしたアプローチとは少し角度をかえて、『クリジエス』をもとに、恋愛表現のキーワードである“cuer”という語のさまざまな使い方、意味を調べ、それをもとにこの語が恋愛表現に使われる場合の意味を考察しようとするものである。中世文学・美術における“cuer”についてはエグザンプロヴァンス大学中世研究所の年次研究集会のテーマにも取り上げられたことがあり、さまざまな研究報告が『セネフィアンス』の第30号にまとめられている。中にはちょうどドクレチヤン・ド・トロワ作品についての論考もあるのだが、いわゆる辞書的意味のレベルでの考察にとどまっている¹⁰。本稿では、あらためて辞書的意味について見直し、次にいわゆる擬人法・擬人化表現も含めた概念メタファーのレベルでの意味について調べたうえで、主人公たちのコトバを物語の展開ともあわせて考えようとするものである。

1.0 作品中での一般的な用例

ヴァルテール校訂版『クリジエス』(1994)で“cuer”(主格単数あるいは複数での“cuers”も含む)が出てくるのは91箇所である¹¹。またその派生語“corage”が(現代語“courage”)14箇所、またやはり人間の精神性と関わりのある“ame”(âme「魂、霊魂」)は9箇所、“esperit”(esprit「精神、霊」)が2箇所使われている¹²。後に見るように、“corage”は「心臓」の意味では使われないが、現代語“courage”に比べると多様な意味で使われているので“cuer”とともに考察の対象とする。これに対して“ame”は人の生死に関するところでのみ決まって使われる語であり(戦いの場面で、またフェニスの偽装死の話の中で)¹³、また“esperit”(esprit)の2例のうち1回は“cuer”と並べてほぼ同じ意味で使われているが、もう1回は“Saint Esperiz”(「聖霊」)で、用例として少ないのでここではとりあげない。

また、“cuer”という語の使用例が91箇所とは言え、語り手や登場人物が恋する者の気持ちについて話すときにはしばしば、“cuer”を代名詞(“il”, “le”, “le mien”など)によって言い換えるので、これを含む表現(述語動詞など)や、あるいは“cuer”をなにかに譬えて話すところなども考察の対象とする。

1.1 「心臓」と「こころ」

作品中、あとに見るように“cuer”は登場人物や語り手が恋愛感情や恋愛というものについて詳しく描写したり論じたりするときに、一つの場面でいわばキーワードとして使われるのであるが、それとは別にもっとさまざまな意味でも作品中のあちこちで（主に語り手によって）、使われている。まずこうした場合の“cuer”と“corage”の意味を取り上げる。

古仏語の“cuer”は、語源のラテン語“cor”と同様に、一方で「心臓」を、他方でいわゆる「知・情・意」を意味する。「心臓」に「知・情・意」の働きがある、あるいは「心臓」に「知・情・意」があると考えられたからで、その意味では、「心臓」と「知・情・意」とは意味の上で、「容器」と「中味」のようなメトニミーの関係にあると言える。ただし、本稿では煩雑になるので、厳密にメタファーとメトニミーを区別することはしない。

『クリジェス』でも、主人公の戦いの場面で、“cuer”が明らかに「心臓」の意味で使われている。

- (1) Et vet desor la targe pointe / Au Sesne doner tele anpointe, / De tel vertu, tot sanz mantir, / Qu'al cuer li fet le fer santir. [彼はザクセン人に向けて色を塗った盾に一撃を与えると、その威力によって、嘘いつわりなく、相手の心臓に槍の穂先を感じさせた。] vv. 3695-3698

このような表現は“faire sentir le fer à …”（「……に槍の穂先を感じさせる」つまり「……まで槍の穂先を突き入れる」）という言い回しまで含めて、武勲詩以来のものである¹⁴。あるいはまた、フェニスが重病を装うところでも、やはり身体器官として“cuer”が出てくる。

- (2) S'a dit a toz qu'ele ne vialt / Que nus hom an sa chanbre veingne, / Tant con cist max si fort la teingne, / Don li cuers li dialt et li chiés, [そして彼女（王妃フェニス）は皆の者に、誰も自分の部屋に入ってはならぬ、心臓と頭が痛むこの病がひどく自分をとらえている限りは、と命じ] vv. 5652-5655

これに対して、次のような場合には“cuer”は精神的な働きに関するもの、ちょうど日本語で「こころがける」というときの「こころ」を意味している。

- (3) A ce que li ot comandé / Li emperere et conseillié / Que son cuer eüst esveillé / A bien doner et a desprendre / Voldra sor tote rien attendre. [彼（アレクサンドル）は皇帝が彼に命じ、助言したこと、すなわち人々に十分にものを与え金を使うようにこころを目覚ましておくことに、なによりも気をつけようとするであろう。] v. 402-406

ただ、そうした身体的な意味と精神的な意味とを区別するとは言っても、西欧中世人にとっては、「心臓」こそまさにそうした精神的な機能がある場所と考えられていたのであるのから、

ときにはどちとも言えない、あるいはどちらでもあるような場合もある。次の例はアレクサンドルの母の心理の描写である。

- (4) Alixandres toz premerains / Quant de son pere fu partiz, / Au congié de l'empereriz / Qui le cuier a dolant el vantre, / Del batel en la nef s'an antre ; [アレクサンドルは誰よりも先に、父と離れた。そして体の中に苦しむところを抱いたままの皇妃に暇乞いをして、小船から本船へ移った。] vv. 246-250

この例ではまず“vantre”が“cuier”とともに使われている点が興味深い。心理の描写ではあるが、“vantre”との組み合わせで身体的なイメージが強調されている。“vantre”（現代仏語“ventre”）は、狭義には「腹」のあたりを指すが、この“cuier el vantre”という言い回しは、古仏語ではめずらしいものではなく、こうした場合は「胴体、体」というほどの意味である（だいたい体の部位に関する単語の意味、どこを指すかというのは、フランス語でも日本語でも使い方によって異なるものでなかなかデリケートな問題である）。また、“cuier”に付された属詞“dolant”は、前にあげたフェニスの仮病の例での“li cuers dialt”にでてくる動詞“doloir”（「痛む、苦しむ」）の分詞・形容詞であり、同じ単語が使っているのとほぼ同じで、やはり、心理的な痛みと身体的な痛みがともなっているように感じられる。ちょうど日本語で「胸が痛む」と言うように。

そもそも古仏語では体の内側の器官に関する語彙が乏しく、ジョルジュ・マトレによれば、“cuier”（心臓），“cervel”（脳みそ），“poulmon”（肺），“estomach”（胃），“entraille”（臓物），“boëles”（臓物），“foie”（肝臓）ぐらいしかないということである¹⁵。ラテン語テキストならともかく俗語の写本テキストの語彙となれば少ないのは当然と思われる。

一般の西洋中世人が人間の心臓というものをどのように考えていたかについては簡単に論じられるものではないが、西洋中世には諸種の「“cuier”を食べる話」があり¹⁶、また画像でもクレチヤンより後の時代になるが14-15世紀には教会堂の壁画やタピスリーなどに「愛」のモチーフとして「心臓」が描かれている¹⁷。

そもそも心臓というのはユニークな器官である。一方では体の内部にあってそれとは見えないものという点では、眼や手足と違っている。何かの絵で見ることはあっても、「自分の心臓」を見ることはない。他方また鼓動、動悸などによってそこになにかあるものを感じることでできる器官であって、この点では胃腸やまして肝臓などよりもモノとしての存在を感じられる。だからこそ、人間の精神性や感覚など、見えないもの、内なるものの場所、そうした能力そのものと感じられてきたのではないと思われる。

なお和語では内臓に関する語彙はフランス語よりもさらに少なかったようである。内臓に関する用語は、獣を食べていたか、魚を食べていたか、食べるために見ていた動物の内臓に名をつけ、それを人間にもあてはめたとのことである。そのせいか、和語では、内臓に関する語彙

はフランス語よりもさらに少なくてせいぜい「キモ」と「ワタ(ハラワタ)」「腸」という語しかなかったということである¹⁸。また「こころ」の語源はよくわかっていないようである。日本人も昔から「こころ」が体の中にあると思っていたようであるが、「心臓」という内臓器官をイメージしていたようには思えない¹⁹。それに対して、フランス語話者にとっては、「こころ」の意味の“cuer”にもどこか「心臓」のイメージがつきまとっている。だから、この作品でも出てくる、愛の神の矢の話のモチーフもまったくの言葉の上の喩えとは言えない響きがある。語り手はソルダモールが恋に落ちたことをまず次のように描写している。

- (5) Bien a Amors droit assenee : / El cuer l'a de son dart ferue. / Sovant palist, sovant tressue, / Et maugré suen amer l'estuet. [愛の神はまっすぐに彼女を狙い、その心臓を矢で射た。彼女はたびたび血の気を失い、たびたび汗をかき、どうしても彼を愛さずにはいられなかった。] v. 458-461

このモチーフはあとで見るように、このすぐ後に続く、ソルダモールのモノローグにも、アレクサンドルのモノローグにも出てくる、つまり登場人物たちもこのモチーフをもとに恋の苦しみを語るのだが、この描写でも、「血の気を失い」、「たびたび汗をかき」とあるように、身体的・生理的イメージが尊重されているのがわかる。

1.2 辞書的な意味

『クリジェス』作品中の“cuer”の使用例91箇所のうち、“cuer”がはっきりと内臓器官である「心臓」の意味で使われているのは先に挙げた2例だけである。あとは、どちらかと言えば、あるいは明らかに精神的な意味で使われているのである。すでに挙げた3つの例について言えば、「こころを目覚ませておく、こころがける」(3)では「知性・意識」に関するものとして使われており、「苦しむ」(4)では「悲しみ」、愛の神の矢のモチーフ(5)では「恋愛」との関係で使われている。こうした辞書的な分類はもちろんそれほど厳密にできるものではなく、だからこそ“cuer”や「こころ」がよく使われことになるのであろうが、それでも他の多くの例についてもおおまかに分類しておもなものを挙げると以下ようになる。

- (6) Que tote nuit plore et se plaint / Et se degiete et si tressaut / A po que li cuers ne li faut. [(そのため) 彼女は一晚中泣き、嘆き、身もだえし、震わせて、もう少しでこころが失われる(気を失う)ほどであった。] v. 880-882 <意識>
- (7) Cist moz li est pleisanz et buens, / Que de la leingue au cuer li toche, / Sel met el cuer et an la boche, / Por ce que mialz en est seüre. [その言葉が彼女には心地よく好ましいものであり、彼女の舌からこころへと触れたので、彼女はその言葉をもっと確かなものにするために、こころと口の中へ置いたのだった。] v. 4372-4375 <知性・記憶>

- (8) Car por neant ne fuient pas, / Ce se pansse et li cuers li dit. [彼らが何の理由もなく逃げているわけではないということ、それは考えられることであり、こころが彼(クリジェス)に告げることであった。] v. 3650-3651 <知性>
- (9) Et largemant done et despant, / Si com a sa richesce apant / Et si con ses cuers l'en consoille. [(アレクサンドルは) たっぷりとものを与え、金を使った、彼の所有する富にあわせて、また彼のこころが勧めるままに。] v. 409-411 <意思>
- (10) Or m'est cuers et talanz venuz / Que la querele te guerpisse / Et que plus a toi ne chanpisse. [さてはそなたと争うのはやめる、もはやそなたと戦うことはしない、そういうこころになり、気分になった。] (ザクセン公の言葉) v. 4156-4158 <意思>
- (11) Et l'empereres par sa grace / Li done armes et cil les prant, / Cui li cuers de bataille esprant, / Et molt la desirre et covoitte ; [そこで皇帝が好意をもって彼に武具を与えると、彼はそれを受け取る、彼のこころは戦いに燃え、戦いを強く望み、欲していた。] v. 4004-4007 <意思>
- (12) Mes tant vos resai de haut cuier / Que je n'os desdire a nul fuer / Rien qui vos pleise a demander ; [私もまたそなたが高貴なこころの持ち主であると知っているのであればそなたが求めんとすることをあえて拒むつもりはさらさらない。] (ザクセン公の言葉) v. 3973-3975 <気質>
- (13) Et Clygés vers les Sesnes point, / Desoz l'escu se clot et joint, / Lance droite, la teste an son ; / N'ot mie mains cuier de Sanson, / N'estoit pas plus d'un autre forz. [そしてクリジェスはザクセン勢に向けて拍車をかける、盾の後ろに身を縮め折り曲げ、槍はまっすぐに頭を先頭にして。彼はかのサムソンに劣らぬこころを持っていた、他のものより強かったわけではないが。] v. 3535-3539 <勇気>
- (14) Clygés, quant Fenice cria, / L'oï molt bien et antendi ; / Sa voiz force et cuier li randi ; [クリジェスはフェニスが叫んだとき、彼女の声をしっかりと耳にした。彼女の声が彼に力とこころを与えた。] v. 4104-4106 <勇気>
- (15) Por feire la joste premiere / Est Lanceloz del Lac sailliz, / Qui n'est mie del cuier failliz. [(騎馬槍試合で) 最初の勝負を行うためにランスロが飛び出した、彼はけっして臆病なこころの持ち主ではなかった。] v. 4750-4752 <勇気>
- (16) Si li est tart que ele en oie / Chose de coi ses cuers ait joie. [彼女(フェニス)は自分のこころが喜ぶことについて一刻も早く知りたかった。] v. 2885-2886 <喜び>
- (17) S'est ja tant dit et puepleié / Que neis cele dire l'ot / Qui an son cuier grant joie en ot, [そのことはたいそう人々に語られ知られることになってついには彼女(フェニス)もそれを聞いて、こころに大きな喜びを抱いた。] v. 2960-2962 <喜び>

- (18) Quant la parole a entandue / Cligés, que cil li vet criant, / N'en a mie son cuer riant, / Einz est mervolle qu'il n'enrage. [クリジェスはこの者が叫んでいるその言葉を聞くと、それによってうれしく思うどころか（こころが笑えるようなことはなく）、彼がかつとしないほうが不思議であった。] v. 3680-3683 <喜び>
- (19) Molt puet estre par defors tristes, / Mes ses cuers est si liez dedanz, / Car a sa joie est atendantz. [(病気を装っているフェニスのもとをそれと知って訪れたクリジェスについて) 彼は外見は悲しんでいるように見えたかも知れない、しかし、その内側で彼のこころは喜んでいた、と言うのも、自分にとって喜ばしいことを待つ身であったので。] v. 5678-5680 <喜び>
- (20) An son cuer a son duel covert, / Et se nus garde s'an preist, / A sa contenance veïst / Con grant destrece avoit el cors / Au sanblant qui paroit defors. [(アレクサンドルが死んだと思こんだソルダモールについて) 彼女は自分のこころの中に自分の苦しみを隠した、そこで注意して見ることがなければ、彼女の表情から、外側に見える様子から、彼女が体の内にどれほど大きな悲しみを持っているかわかるものではなかった。] v. 2110-2114 <苦しみ>
- (21) De Fenice li resovient / Qui, loing de lui, son cuer travaille. [彼(クリジェス)はたびたびフェニスのことを思い出した、彼女は彼から離れたところにあつて彼のこころを苦しめた。] v. 5058-5059 <苦しみ>
- (22) N'ele ne set pas se il vit, / Don granz dolors an cuer li toche. [彼女(フェニス)は彼が生きているのかどうかさえわからず、そのために大きな苦しみが彼女のこころに触れるのだった。] v. 5088-5089 <苦しみ>
- (23) Amors li est el cuer anclose, / Une tançons et une rage / Qui molt li troble son corage, / Et qui l'angoisse et destraint [愛の神が彼女(ソルダモール)のこころの中に閉じこもると、ある葛藤と激情が彼女の気持ちをはげしく揺さぶり、彼女を不安にし、責めて] v. 876-878 <恋愛>
- (24) Car a lui s'otroie an tranblant, / Si que ja n'an metra defors / Ne volanté ne cuer ne cors / Que tote ne soit anterine / A la volonté la reïne, [なぜなら彼女(ソルダモール)は、体を震わせながら、自分の身を彼女(王妃)にゆだねる、意志とこころと体をよそへ置くことはしない、それらはいずれもまったく王妃の意志に従うというようにして、] vv. 2318-2322 <他人への服従、忠誠>
- (25) Morte sui, quant celui ne voi / Qui de mon cuer m'a desrobee, [私から私のこころを奪った人を眼にすることがないのであれば私は死んでも同然、] v. 4442-4443 <恋愛>
- (26) Molt li tarde que celi voie / Qui son cuer li fortret et tolt. / Mes bien li rant et bien li solt / Et bien li restore sa toste, / Quant ele li redone a soste / Le suen, qu'ele n'ainme pas mains. [彼(クリジェス)は一刻も早く自分のこころを盗み奪った女性(クリジェス)に会

いたかった。しかし(盗んだというものの)彼女のほうも、彼に与えるものは与えている、代金を払い、その税も払ってあるのだ、彼に即金で彼女の心を与えたということで。というのも彼女のほうも彼に劣らず彼を愛していたのだから。] v. 5074-5079 <恋愛>

1.3 他の語との組み合わせ

以上の例で“cuer”は多く定冠詞や所有形容詞をともなって使われている。現代フランス語では体の部位を意味する単語について、定冠詞をつけるのが原則であり、ここでも“Qui le cuer a dolant”「苦しむところを抱いた」(4)(カッコつき数字は例文番号、以下同じ)、“li cuers faut”「ところが失せる(気を失う)」(6)、“li cuers li dit”「ところが彼に言う」(8)、“Amors li est el cuer anclose”「愛の神が彼女のところに閉じこもる」(23)などでは定冠詞つきであるが、“ses cuers l'en conseil”「彼のところが勧める」(9)、“a ... son cuer riant”「笑えるようなところを持つ」(18)、“An son cuer a son duel covert”「自分のところのなかに自分の苦しみを隠した」(20)のように所有形容詞をつけた表現が多い。もちろん、こうした限定詞の使い方には韻文において音節数をあわせる都合もあるだろうが、多用される所有形容詞にはあとにも見るように、定冠詞とは違うニュアンスがあるように思われる。

“cuer”がいくつか無冠詞で使われている場合もある。やはり音節数の都合があり、その上で“de haut cuer”「高貴なところの」(12)のような慣用的語法、“ne volanté ne cuer ne cors”「意志もところも体も……ない」(24)のような列挙の場合の省略などとしても説明がつく場合があるが、興味深いのは“cuer”が数えられないものとして使われているように思える例である。“mains cuer de Sanson”「サムソンに比べてより少ないところ(勇気)」(13)がそれで、また“Sa voiz force et cuer li randi”「彼女の声が彼に力とところ(勇気)を与えた」(14)という場合もそこにイメージされるのは「一つのところを与える」ではなくまさに「ある量のところ」といったようなものである。どちらの例の場合も、現代仏語であれば“courage”を使うところである。とは言え、こうした不可算名詞としての“cuer”、つまり“cuer”でなにか形の定まらないものとしてイメージさせるような用法は少ないのではないかと思われる。これは“cuer”が当然のことながら体の中の形ある一つのモノとしてのイメージを喚起させやすいからではないかと思われる。

1.4 構文上の位置・役割

つぎに“cuer”をどのような構文で使っているかに注目する。

i) (avoir, estre de) le cuer + 形容詞(付加形容詞、属詞)

“avoir son cuer éveillé” (3), “avoir le cuer dolant” (4), “cuers esprant de bataille” (11),
“(estre) de haut cuer” (12), “(estre) del cuer failliz” (15), “avoir son cuer riant” (18)

ii) en(dans, a) le cuer

“ferir el cuer” (5), “an son cuer grant joie” (17), “covrir son duel dans son cuer” (20),

“faire sentir al cuer” (1), “toucher au cuer” (7), “Amors est anclose el cuer” (23)

iii) cuer (主語) + 動詞

“li cuers dialt” (2), “li cuers faut” (6), “li cuers dit” (8), “ses cuers consoille” (9), “cuers est venuz que ...” (10), “li cuers desirre et covoitte” (11), “ses cuers ait joie” (16), “ses cuers est liez” (19)

iv) 動詞 + le(son) cuer (目的語)

“travailler son cuer” (21), “metre le cuer” (24), “fortraire et tolir son cuer” (26)
[“desrober~de son cuer” (25)]

v) その他 (不可算名詞として)

“avoir cuer” (13), “randre cuer” (14)

こうしてみると、まず同じ喜び・苦しみの表現にも、“avoir le cuer dolant”「苦しいところを持つ」、 “avoir joie dans son cuer”「ところの中によろこびを持つ」、 “li cuers dialt”「ところが苦しむ」、 “le cuer a joie”「ところが喜びを持つ」、 “travailler son cuer”「(何かが) ところを苦しめる」のような多様な表現方法があることがわかる。ここで注目したいのは、いずれも「ところ」を形あるひとつのものとしてイメージさせる表現であるが、なかでも ii) の型では、「ところ」を一つの容器のようなものとして認知している点である。「ところ」は喜びや苦しみ、あるいは記憶が置かれる容器である。ただし、たとえば日本語なら「喜びに満ちたところ」というとき、「ところ」はやはり容器としてイメージされているが、中にある「よろこび」は液体としてイメージされている。それに対して、おそらくここに挙げた例に関する限り、「ところ」は大切な宝物をしまっておく容器、中にあるのも形あるもののようにイメージされている。ちょうど擬人化された「愛」がそこに閉じこもるように、「愛情」も形あるひとつのものであり、やはり日本語で「愛情があふれる」と言うようなイメージとは違っている。

はじめに名前をあげたゾルターン・ケヴェチェシュは愛の概念メタファーの一つとして「容器の中の液体としての愛」(Love as a Fluid in a Container) をとりあげている²⁰。英語では “She was filled with love.” とか “He poured out his affections on her.” のような表現がこれにあたる。現在の日本語からすれば、日本語も同じようにこの概念メタファーがあてはまるように思われる。

ここにとりあげた “cuer” に関する例だけについてみれば、この概念メタファーにはあてはまらないように思える。が、もちろん、このわずかな例だけで断定はできないので、他の単語をもとにしたり、クレチヤンの他の作品、さらに他の古仏語テキストについて調べるとおもしろいのではないかと思われる。

1.5 擬人表現

“cuer”の使い方については、他の単語との組み合わせ、たとえば“avoir son cuer éveillé”「こころを目覚めさせておく」(3)や“ses cuers ait joie” (16)「こころが喜びを持つ」のような、いわゆる擬人法表現がみられる。こうした擬人法は『薔薇物語』に典型的な抽象概念の擬人化(例えば、「理性」が一人の女性として登場して話をする)とは、「なにかを人間にたとえる、みたてる」という点では同じだが、いくつか違う点もある。その違いを理解するには、つぎの4つの点を区別しておく必要がある。

まず、第一に、「花笑い鳥歌う」というような文章表現の擬人法は、より一般的にはカテゴリー転換による表現の一つのタイプといえる²¹。植物を動物を人間に見立てれば<擬人法>、逆に人間を植物に見立てて「枯れてきた」といえば<擬物法>などと区別されるが、どのようなカテゴリーを区別するかによってそれだけ用語が必要となる。むしろ、注目すべきは、たとえば“avoir son cuer éveillé”の場合には“cuer”(こころ)という眼にみえないものを表す語に、“éveillé”というふつう人間にしか使わない語を組み合わせていることである。従ってこれを擬人法表現と呼んでもよい。“(estre) de haut cuer” (12)という表現の場合には、“cuer”(こころ)をなにか価値づけできるモノ、そこにはさらに空間の上下関係によって価値の大小を示す、そうした見立て、認知がもとになっていると思われる。

つぎに、そうした互いに異なるカテゴリーで使われる表現を組み合わせるといっても、「異なる」かどうかはつねにはっきりしているわけではない。たとえば“son cuer riant” (18)にある形容詞“riant”は“rire”「笑う」の現在分詞ではあるが、Tobler-Lommatzsch 古仏語辞典でも「比喩的に (figürl.)」のラベルの後で、『ロランの歌』以来、顔(“vis”)や眼(“le oel”)、口(“bouche”)について使われているのであって、もともとは「人が笑う」ところから来ているにせよ、笑う時の眼や口のように「笑っているように」と使い、それを一方では体の一部をもイメージさせる“cuer”に使っているのであれば、この場合は、単純に「こころ」を人間に見立てている表現とは言いがたい。また“avoir son cuer éveillé”という表現ももとは擬人法による表現であっても、この時代にあってはすでにあまりそれを意識させない慣用的表現になっているとも言える。

また、「人間に見立てる」というのは、言語表現だけのレヴェルのことでもあれば(「擬人法」)、概念レベルの場合のことでもありうる。「理性」が物語の中で語る、といった抽象概念の擬人化(擬人メタファー)はこの概念レベルの擬人表現である。これも両者をはっきりと区別できるわけではない。先の例の中の“ce ... li cuer li dit”「こころが彼にそう言う」(8)の場合は擬人法のレベルであるが、ここで、言った内容が直接話法で表現されていれば、言った主体の「こころ」の音が聞こえてくるように感じられるであろうし、その「こころ」が仮に登場人物の前に人間の姿をまとして現れる、その人物の外見や表情、動作が描写されるとなると、これははっきりと擬人化表現(擬人メタファー)ということになる(ここでは定冠詞の有無の

問題はおいとく)。先に挙げた例では、とくに「こころ」を主語とする表現で、“dire”「言う」、「consoillier」（助言する）、「deirer」（欲する）のような動詞が使われているが、いずれも擬人法レベルの表現である²²。

最後に、何かを何かに見立てる場合、既知のものを既知のもので表現する場合と未知のものを既知のもので表現する場合とが、これも厳密にできるものではないが、場合によって区別が必要である。「花笑い鳥歌う」は一方で「花」や「鳥」というものを知っていて、その様子を人間に見立てて「笑う」や「歌う」と表現する。それに対して、「理性」を人間に見立てるとするのは、抽象概念というかおよそ眼に見えないなにかを「人間」として理解し、表現する、つまり認知する方法である。もちろん、“raison”「理性」や“joie”「歓喜」も、物語の中で擬人化表現（擬人メタファー）として登場するよりも、まず言語レベルで、なにかの大きさをもったモノとして認知される。そうした概念メタファーがあってはじめて「理性」や「歓喜」について語るができる。“cuer”の場合は、事情がさらに複雑で、「こころ」をモノとして語ると言っても、そこには漠然とでも「心臓」という形あるものがイメージされている。だからこそ、先に見たように、部分冠詞をとった表現になりにくいのではないと思われる。

1.6 “corage” の例

さて、次に、“cuer”の派生語“corage”について、“cuer”の場合と同様に、辞書的意味の点で区別し、全14例からおもなものを挙げると以下ようになる。“corage”をはっきりと「心臓」の意味で使う例はなく、また登場人物や語り手の恋愛についてのコトバの中でキーワードとして使われることもない。

- (27) Alixandre vint an corage / Que il aille le roi proier / Que il le face chevalier, [アレクサンドルはこころの中で自分を騎士に叙任してもらえるように王に願いに行こうという思いに至った、] vv. 1104-1106 <意志>
- (28) Se vos en avez boen corage, / J'asanblerai le mariage. [もしあなたが十分にこころがあるのでしたら、私が結婚をとりはからいましょう。(王妃の言葉)] vv. 2293-2294 <意志>
- (29) Mes ce tandrai a vilenie, / Se par peresce ou par folie / Vostre corage me celez. [しかし、こんなことがあるようでしたら卑しいこととしますわ、あなたさまが面倒がって、あるいはばかなお考えからあなたさまのこころを私にお隠しになるようなことがありましたら。(フェニスに対する乳母のテッサラの言葉)] vv. 3105-3107 <意図>
- (30) Or vos doit Dex del revenir / Corage et volenté par tans. [神がそなたにほどなく帰国するこころと願望とを与えんことを。(皇帝アリスのクリジェスへの言葉)] vv. 4256-4257 <意志>

- (31) La volenté de son corage / Toz jorz en un panser le tient : [彼のこころの願いがいつも彼をある考えに引き止めていた。] vv. 5056-5057 <願望>
- (32) Or la vit pale et or vermoille / Et note bien an son corage / La contenance et le visage / De chascun et d'aus deus ansanble. [彼女(王妃)は彼女(ソルダモール)の顔がときに青ざめ、ときに紅潮するのを見てとり、(ソルダモールとアレクサンドル)一人ずつの、また二人いっしょの表情と顔とをこころの中にとどめた。] vv. 1588-1591 <記憶>
- (33) Tant fu preuz et de fier corage / Que, por pris et por los conquerre, / Ala de Grece an Engletrrre, [彼(アレクサンドル)は雄々しく、また勇ましいこころをしていたので、名誉と賞賛を得るためにギリシアからイギリスへ行った、] vv. 14-16 <気質>
- (34) Une tançons et une rage / Qui molt li troble son corage, / Et qui l'angoisse et destraint [対立と激情が彼(アレクサンドル)のこころを強く揺さぶり、また苦しめ締め付けると] vv. 877-879 <苦しみ>

だいたい、“corage”は3音節であって、1音節の“cuer”の方が、韻文では使いやすいだろう。また“cuer”は“cors”(現代語で“corps”「肉体」と音の上で、1音節で頭韻のペアを作るので、とくに本作品のように「こころ」と「体」が問題となるときには、派生語の“corage”よりも本来の“cuer”が使われて当然である。他方、“corage”は14例中、12例が詩句末にあるように、“linage-corage”(vv. 13-14)、“rage-corage”(vv. 877-878)、“rivage-corage”(vv. 1103-1104)などと脚韻を踏ませるのに都合のいい単語である。辞書的な意味で言えば、「心臓」とか「意識」など身体的なモノとして使われることはないが、あとは「意志」や「気質」、「苦痛」に関する意味として使われる点では“cuer”とあまりかわらないように見える。例文(10)“m'est cuers et talanz venuz que...”「……するこころと気分が私に訪れた」と例文(30)“del revenir corage et volenté”「帰国するこころと意志」、あるいはまた例文(21)“son cuer travaille”「彼のこころを苦しめる」と例文(34)“troble son corage”「彼のこころを揺さぶり」については、それぞれ“cuer”と“corage”を入れ替えても同じように思われる。しかしながら、“corage”は「こころ」そのものというよりも、「こころのある状態」を表現するのに使われることが多いように思われる。たとえば、今あげた“del revenir corage et volenté”「帰国するこころと意志」(30)もそうだが、ほかには、“en avez boen corage”「そうするこころを持っている」(28)や“fier corage”「勇ましいこころ」(33)のように。逆に、“cuer”の場合にはあった、“cuer”を主語とする表現、“li cuers dit”「こころが言う」(8)や“ses cuers ait joie”「こころがよろこびを持つ」(16)というような表現が、“corage”についてはない。興味深いのは“vostre corage me celez”(29)「そなたのこころを私に隠す」という王妃の言葉で、この場合は、どのようなこころをもっているか、どのように考え感じているかを隠すという意味であって、こころをそのものをどこかへ隠してしまうというのとは違っている。それは、“cuer”については、“metre le cuer defors”「こころを外におく」(24)や“fortraire et tolr le cuer”

「こころを盗み奪う」(26)というような表現がしばしば使われているのとは対照的である。

2.0 恋について語る場面

以上、作品中で“cuer”や“corage”の語が「心臓」を指示する語として、そして人物の行為や心情の描写にどのように使われているかを考察してきたが、つぎに、語り手や登場人物たちが“cuer”の語をキーワードとして恋愛の心情について語る場合を取り上げる。

この作品では2つの時代の2つの若者たちの恋が語られる。いずれも、それまで恋をしたことのなかった若い理想的な男女が会ってすぐに互いに相手を思うようになり、互いの気持ちを確認めるという段階を経て、いずれの恋も最後は結婚という幸福な結果になる。

はじめのアレクサンドルとソルダモールの場合には、それぞれが恋を自覚し、悩み、告白をためらっていたところ、アーサー王の王妃（この作品では名前が出ていない）が仲介して互いの気持ちを確認させる。作者クレチヤンがここで腕を揮うのは、自分の恋する気持ちをどのように語るのか、そしてまた恋の成就についてどのように語るのかという点である。ここでは、“cuer”の語が使われている個所として、

- 1) ソルダモールのモノローグ (vv. 473-521)
- 2) アレクサンドルのモノローグ (vv. 624-870)
- 3) 王妃と二人が話す場面 (vv. 2236-2331)

をとりあげる。

つぎのクリジェスとフェニスの場合、状況が複雑である。ドイツ皇帝の宮廷でクリジェスがフェニスに出会ったとき、すでにフェニスは自分の叔父でありコンスタンティノープル皇帝であるアリスの婚約者であった。クリジェスはアリスを皇妃として迎えるためにドイツへ向かったギリシア軍の一員として皇帝アリスに随行していた。しかし、二人は初対面で互いに恋に落ちる。が、たがいに思いを打ち明けることなく、その後、クリジェスはドイツからブリタニアのアーサー王のもとへ向かい、フェニスは夫アリスとともにコンスタンティノープルへやって来る。クリジェスを想うフェニスはテッサラの秘薬の助けにより、夜の床では夫アリスを夢でだまして自分の体に触れさせないままに過ごす。やがてフェニスを想うクリジェスが帰国し、二人は再会して互いに相手の気持ちを知る。ここからあとは、フェニスの偽装死によって二人は逃れ、隠れ住むが、やがて露顕し、アリスの軍勢に追われ、アーサー王も巻き込むが、最後はアリスが都合良く死んでくれたおかげで、二人は晴れて正式にコンスタンティノープルの皇帝と皇妃の位につく。ここでは、次の個所を取り上げる²³。

- 4) 二人の出会い（語り手）(vv. 2696-2836)
- 5) フェニスとテッサラ（フェニス）(vv. 3119-3177)
- 6) フェニスのモノローグ (vv. 4396-4560)
- 7) 再会したクリジェスとフェニス (vv. 5162-5264)

2.1 ソルダモールのモノローグ (vv. 473-521)

ソルダモールはいきなり恋に悩む女として物語に登場する。語り手がそれまで「恋(恋の神)を軽蔑し」(“desdaigneuse estoit d’amors”, v. 444)、どれほどの男であっても愛することはなかったソルダモールが、愛の神の復讐をうけたこと、すなわち愛の神の放った矢を“cuer”「心臓」にうけた(先にあげた用例(5))ことを語ると、ブリタニアへ向かう船中で一人嘆くソルダモールのモノローグが、以下のように、自分の眼に対する呼びかけではじまる。

Et dit : « Oel, vos m’avez traie ; / Par vos m’a mes cuers anhaie, / Qui me soloit estre de foi. / ... / Einsi me porrai bien garder / D’Amor, qui justisier me vialt, / Car cui ialz ne voit cuers ne dialt ; / ... / Mi oel a nule rien n’esgarde, / S’au cuer ne plest et atalante. / Chose qui me feist dolante / Ne deüst mes cuers pas voloir. [そして言うのだった「眼よ、おまえは私を裏切ったのだ。おまえのために、私のところは私を憎むようになったのだ、かつては私に忠実であったのに。……だから私は私を支配しようとする愛の神に十分に用心することができるだろう。なぜなら眼で見ることのない者にあってはこころが苦しむことはないのだから。……私の眼は何も見ることはない、こころの気に入る、気を引くものでなければ。私を苦しませるようなものを私のこころが望むはずはないのだ。] (vv. 473-475, 484-486, 504-507)

こうして彼女は自分の苦しみを嘆き、自分が愛の神に支配されている、すなわち自分が愛しているのだろうかかと自問する。愛の神が自分の“cuer”を矢で射たとまでは言っていない。興味深いのは擬人アナロジーである。はじめの「眼よ、おまえは……」という自分の眼に対する呼びかけは、「眼」を人間に見立てたコトバである。ここで「眼」は返事をしないが、「眼」がもし答えるようなことであれば、これが古典修辞法本来のプロソポペイアであるが、その前の段階の擬人アナロジーと言える。“cuer”に対して呼びかけることは、この場面でも、他の場面、他の登場人物にあっても、この作品ではない。しかし、“cuer”はここで一方ではよびかけの対象となっている「眼」と同等のものとして示され、また“anhair”「憎む」、「plaire」「気に入る」、「voloir」「望む」のような動詞と関係づけられて、人のような存在としてイメージされている。その時点ですでに“cuer”は「わたし」とは別の存在である。そして、本来自分に対して「忠実である」(“estre de foi”)、すなわち自分とはいわば友人関係、というよりも主従の関係にあるはずの“cuer”が「わたし」に逆らっている、という言い方で自分の気持ちを表現していることになる。

2.2 アレクサンドルのモノローグ (vv. 624-870)

ソルダモールのモノローグに続いて、語り手はアレクサンドルとソルダモール、それぞれに思いが募っていくようすを説明しながら物語を進めていく。そして、恋の悩みで眠れる夜を過ごすアレクサンドルのモノローグ(自問自答を含む)が出てくる。まず、自分の苦しみ、病について自問し、それが愛の神(Amour)によるものであると気づく。

- Et si te plaing ? Don n'as tu tort ? / - Nenil, qu'il m'a navré si fort, / Que jusqu'au cuer m'a son dart trait, / Mes ne l'a pas a lui retrait. / ... / - A l'uel ne m'a il rien grevé / Mes au cuer me grieve formant. / ... / Li cuers por coi s'an dialt el vandre, / Que li ialz ausi ne s'en dialt, / Qui le premier cop an requialt ? [「それでおまえは嘆いているのか、おまえが間違っているのではないのか」「いや、愛の神が私をあまりにひどく傷つけたからだ、私の心臓をその矢で射て、そして矢を自分のもとへ引き戻そうとしなかったのだから」……「愛の神は私の眼はなにも苦しめず、私の心臓をととも苦しめているのだ」……「そのために心臓は体の中で苦しんでいる、第一撃を受けた眼の方はそれで同じように苦しんではいないというのに」] (vv. 689-692, 698-699, 704-706)

恋が愛の神の矢を“cuer”にうけることによって始まるというのは、さきにソルダモール登場にあたって語り手のコトバにあったものだが、それが登場人物のアレクサンドル、コンスタンティノーブルの若い皇子の口から出てくる。しかも、ここではその矢が眼から入って“cuer”にささり、そのために「心臓が体の中で苦しんでいる」と言っている。先に見たように、ここでも“cuer”は“vandre”とともに使われて身体がイメージされている。だからこそであろうか、ここからアレクサンドルは、前のソルダモールのように“cuer”を擬人化して自分の気持ちを語るのではなく、一般的な眼と“cuer”の働きというものについて論じていく。なぜ“cuer”は痛み苦しむのに、眼のほうは傷つかないのかと。

Mes c'est li mereors au cuer, / Et par ce mireor trespasse, / Si qu'il ne blesce ne ne quasse, / Li sens don li cuers est espris. / Donc est li cuers el vandre mis, / Ausi com la chandoile esprise / Est dedanz la lanterne mise. [しかしそれ(眼)はこころの鏡であり、感覚は傷つけたり壊したりせずにこの鏡を通過して、こころがこの感覚(像)という火で燃える。だからこころは体の中に置かれている、ちょうど火のついた蠟燭がランタンの中に置かれているように。] (vv. 710-716)

愛の矢が眼を通して心臓に達するというのは、すでに『エネアス物語』にも出てくるモチーフである²⁴。ここで作者クレチヤンはさらにランタンのたとえを持ち出してくる。ただしこのたとえは713行の“li sens”の意味も含めてすんなりと理解できるものではない。“li sens”をヴァルテール現代語訳はおそらく文脈から解釈して“l'image sensible”としている。アレクサンドルはこのモノローグのずっと後のほうで愛の神の矢のそれぞれの部分の美しさを描写し、そこにソルダモールの額、眼、鼻などの美しさを重ねている。したがって外から眼を通して入ってきて、それによって“cuer”が火のついた状態になる(“espris”)ものが、外界の“image”(像)であるとは理解できるが、“li sens”だけでそのような意味になるのかどうか、論者には判断できない(メラ=コレ訳は“le sentiment”と訳している)。また、だいたい、ランタンと言えば、まず光が中から外へ向かうものとしてイメージするものであって、そこから何かが内側へ入ってくるという、愛の矢のイメージと合わない。おそらく作者クレチヤンは、一方で光がガラスを傷つけることなく通過することと、他方では内側で燃えている火ということでこの

ランタンのたとえを持ち出してきたのではないかと思われる。アレクサンドルはこのランタンのたとえにつづけて、教会堂のステンドグラスのたとえも加えて、“cuer”が外界をどのように見るのかについて次のように自問自答を続けていく。

Ce meisme sachiez des ialz, / Con del voirre et de la lanterne : / Car es ialz se fiert la luiserne / Ou li cuers se remire, et voit / L'uevre de fors, quex qu'ele soit ; / Si voit maintes oevres diverses, / ... / L'une blasme, et l'autre loe, / L'une tient vil, et l'autre chiere. / Mes tiex li mostre bele chiere / El mireor, quant il l'esgarde, / Qui le traist, s'il ne s'i garde. [ガラスやランタンと同じことが眼についても言えることを知らねばならない。なぜなら、光が眼の中に衝突すると、こころがその眼の中に自らの姿を見、そして何であれ外のものを見るからだ。そして多くの様々なものを見る、(……)あるものは貶し、あるものはほめる、あるものはつまらぬ、あるものを貴重であると評価する。しかしそれ(こころ)が鏡の中をみる時には愛想よくするが、それ(こころ)が用心していないとそれ(こころ)を裏切るようなものもある。] (vv. 730-735, 738-742)

ランタンのたとえに続けて、“cuer”が見ることが論じられているところに、古代以来の中世ヨーロッパ人の視覚についての一つの理論、外送理論が反映しているという解釈があるが、そう簡単に結論づけられるような問題とは思えないので、その是非はここでは措いておく²⁵。むしろここでは、ランタンのたとえによってまずモノとして捉えられてきた“cuer”が、「見る」ということから擬人化されている点に注目したい。引用中の最後に“cuer”を“trahir”「裏切る」、 “cuer”が“se garder”「用心する」などという動詞も使われているように。そして、今の引用に続けて、アレクサンドルもソルダモール同様、眼の裏切りを嘆く。

Moi ont li mien oeil deceü, / Car an lui a mes cuers veü / Un rai don je suis anconbrez, / Qui dedanz lui s'est aombrez, / Et por lui m'est mes cuers failliz. / De mon ami sui mal bailliz, / Qui por mon anemi m'oblie. [私の眼が私を裏切った、なぜなら私のこころがそれ(眼)の中にある光線を見たのだが、その光線によって私が困惑した、その光線はそれ(こころ)の中に宿った、そしてその光線のために私のこころは私から失われた。私は私の友からひどい仕打ちを受けたのだ、私の敵のために私を忘れるのだから。] (vv. 743-749)

“cuer”が見た光が“cuer”に「宿る」(“s'aombrer”)、そして“cuer”が私から失われるというように、ここでは“cuer”はモノであり、人でもある。とくに“s'aombrer”というキリストの受胎に使われる語が使われているのが面白い。先のステンドグラスのたとえこそ、中世では聖母マリアの処女懐胎を説明するたとえとして説教や文書で好まれて使われたものであり、そこでこの“s'aombrer”という語が出てくるのは自然な流れである。すると、この恋をするということは、まさにキリストの受胎のようにとまではゆかずとも、少なくとも尊敬すべきものとして認知されていることになる。

そもそもはじめのランタンのたとえというのも、いわゆる中世のフランス語アレゴリー作品

には『ランプの賦』(*Dit de la lampe*)²⁶というものが残っているぐらいで、現存するテキストは13世紀末で、クレチャンより1世紀後にできたものようであるが、おそらくすでにクレチャンの時代にも、ランプやランタンを使って何かを説明するというのはやはり教会人の説教や著作ではなじみの手法だったのではないだろうか。こうしたたとえの原理は、なにかを構成要素に分けて別のものとの対応関係を示すというものである。恋の芽生えという現象を、愛の神の矢が心臓にささるといふ原理を利用するのはローマ神話以来のものだが、中世にはさらに“cuer”と眼と外界との3つに分けてそれを説明し、理解しようとしたと言える。だからこそ、そうした個別の要素、モノは同時に擬人化して理解しやすいものとなる。アレクサンドルもソルダモール同様、“cuer”と2つの眼が、かつては友(味方)であり従者でもあったのが、今では自分の敵となったと言って嘆くのである。

Ha, Dex, ou sont mes mi ami, / Quant cist trois sont mi anemi, / Qui de moi sont et si m'ocient ?
/ Mi sergent an moi trop se fient, / Qui tote lor volanté font / Et de la moie point ne font. [あ
あ、神よ、いったい私の友たちはどこにいるというのか、これら3人が私の敵というのであれ
ば。彼らは私の僕でありながら私を殺すのか。私の従者たちはあまりに私のことを信用してい
て、まったく自分たちの望むことをして、私の望むことは何もしないのだ。] (vv. 755-760)

このようにアレクサンドルのモノログにあつて、一方で“cuer”はモノとして捉えられ、さらにまたヒトのように捉えられている。擬人化のレベルは言語表現だけの擬人法より上の、概念レベルとなっている。しかし、「友」や「従者」という存在であり、せいぜい「憎む」、「見る」、「望む」とか、ばくぜんと「私を殺すのか」と言われる程度で、いわばそこに座っているままで、まだ立ち上がって動き出してはいるようには感じられない。

2.3 王妃と二人が話す場面 (vv. 2236-2331)

アレクサンドルは意を決してソルダモールの気持ちを確かめようと彼女のいる王妃の天幕を訪れる。するとかねてから二人の思いを察していた王妃、「二人が互いに愛し合っていることにまったく疑いを抱いていなかった」(“Qui n'estoit de rien an dotance / Qu'il ne s'antreamassent andui,” vv. 2254-2255) 王妃がアレクサンドルの気持ちを察して、二人に、まず愛とはどういうものかを教え諭し、愛の成就としての結婚を勧める。ここで、“cuer”という語が重要な役割を果たす。たとえば王妃自身は「互いに愛し合う」(“s'antreamer”)とは言わず、「二つのところを一つにする」(faire un de deux cœurs)と言う。

Qu'aparceüe m'an sui bien / As contenances de chascun / Que de deus cuers avez fet un. [な
ぜなら私はめいめいの表情からあなたがたが二つのところを一つにしたことはよくわかりま
した。] (vv. 2278-2280)

そしてこの場面の最後、王妃は次のように命じる。

An riant dit : « Je t'abandon, / Alixandre, le cors t'amie ; / Bien sai qu'au cuer ne fauz tu mie. / Qui qu'an face chiere ne groing, / L'un de vos deus a l'autre doing. / Tien tu le tuen et tu la toe. [(王妃は) 笑いながら言った。「アレクサンドルよ、私はあなたが恋する人の体をあなたにゆだねます。あなたにはこころの方は欠けていないのはよくわかっています。不満な顔をする人があろうがあるまいが、あなた方ふたり、私がそれぞれをそれぞれに与えます。あなたはあなたのものである男性を、そしてあなたはあなたのものである女性を受け取りなさい。] (vv. 2326-2331)

ヴァルテールはこの場面について、キリスト教の神父が司る教会の結婚式の原型、「花婿花嫁の〈贈与〉という非宗教的な儀式的行為 (un acte laïc de « donation » d'époux)」を反映していると注をつけている²⁷。最終的には人そのものを与えるということだが、それはつまり「こころ」(“cuer”)と「からだ」(“cors”)を与えあうことを意味する。ここで“cuer”は土地や財産のように、所有したり贈与したりできるようなモノとしてイメージされている。そしてこの「こころ」と「からだ」を与えるという表現こそ、次のクリジェスとフェニスの恋の物語の核心であり、アレクサンドルとソルダモールの物語は次にはじまるメインの物語を理解するための予習のようなものである。

2.4 二人の出会い (語り手) (vv. 2696-2836)

つぎに“cuer”が問題となるのは、コロニュー (ケルン) のドイツ皇帝の宮廷をコンスタンティノーブル皇帝一行が訪れた場面。居並ぶ貴顕貴女の中でひとときわ目立つクリジェスとフェニスの二人がひそかに視線を交わす場面。ここでは、それぞれが口に出している言葉も内心のモノログもなく、語り手が二人の様子を描写し、そしてその語り手自身が自問自答する。

Et s'ele rien amer devoit / Por biauté qu'an home veist, / N'est droiz qu'ailors son cuer meist. / Ses ialz et son cuer i a mis, / Et cil li ra son cuer i a promis. / Promis ? Qui done quitemant ! / Doné ? Ne l'a, par foi, je mant, / Que nus son cuer doner ne puet ; [もし彼女が男性のうちに見出すなにかをその美しさゆえに愛さねばならないとしたら、彼女がよそに彼女のこころを置くようなことは正しくない。彼女は彼女の眼とこころをそこへ置いたのであり、彼の方も彼女に自分のこころを先置きした(約束した)のである。先置き(約束)しただって？ だれがすべて与えるというのだ！ 与えただと？ 誓って、彼はそんなことはしていない。私の言い方が間違っているのだ。なぜなら誰も自分のこころを与えることはできないのだから。] (vv. 2796-2803)

ここでは、まず「愛する」(“amer”)ことが「自分の“cuer”を他人のところに置く (“mettre) 」と表現されている。“cuer”は自分の所有になるモノである。しかし、それを“promettre”「先に置いておく、約束する」となると、単に一時的に「置く」のではなく、「与える」(“donner”)ということになり、そこで現実的になって「こころ」を他人に与えることはできないなどと語

り手が言い出す。そして続けて、

Ne dirai pas si com cil dient / Qui an un cors deus cuers alient, / Qu'il n'est voirs, n'estre ne le sanble / Qu'an un cors ait deus cuers ansanble ; [一つの体の内で二つのところが結びつくなどと言う人たちのように言うことはしない、というのも一つの体の中に二つのところが存在するなどということは本当ではない、本当であるように思えないから。] (vv. 2805-2808)

と言うのをきくと、先ほどの王妃の言葉、愛し合うとは「二つのところを一つにする」ことだという表現が嘘だと言っているように思える。もちろん、作者クレチヤンは単なるストーリーテラーという以上に、ときにこうして自らのコトバを意識したいわば遊びを紛れ込ませる作家であるから意図的に理屈を捏ねるようなことをしているのである。そして最後には次のような喩えを使って問題を解いてみせる。

Seul de tant se tientent a un / Que la volanté de chascun / De l'un a l'autre s'an trespasse ; / Si vuelent une chose a masse, / Et por tant c'une chose vuelent, / I a de tiex qui dire suelent / Que chascuns a le cuer as deus ; / Mes uns cuers n'est pas an deus leus. / Bien pueent lor voloir estre uns, / Et s'a adés son cuer chascuns, / Ausi com maint home divers / Pueent an chançons et an vers / Chantera une concordance / Si vos pruis par ceste sanblance / C'uns cors ne puet deus cuers avoir, / Ce sachiez vos trestot de voir ; [それら（二つのところ）が一つになるというのは（二人の）めいめいの望みが互いに相手の方へ移るということである。そして彼らと一緒に一つのことを望むというわけだが、彼らが同じ一つのことを望んでいるからと言って、めいめいが二人のものである一つのところを持つのだときまって言う人がいる。しかし一つのところが二つの場所に存在することはない。彼らの望みは一つでありえても、めいめいが自分のところを持っていることにはかわりはない。ちょうど多くのさまざまな人たちがひとつの曲や節を斉唱で歌うことができるのと同様である。この喩えによって私は一つの体が二つのところを持つことはできないことをみなさんに証明できるのであって、みなさんはこのことがまったく本当のことだと納得いただきたい。] (vv. 2818-2830)

語り手は愛するものの“cuer”を斉唱するふたつの歌声、音に喩える（楽器ではない）。このように物語の進行を中断して、議論を続けるところ、これは作者の単なる遊びというものではない。ひとつには、物語の進行が中断しているからこそ、物語の中ではクリジェスとフェニスが無言のうちに、互いを見つめ、相手への思いを募らせている時間が続いているのである。また、ストレートに自分の思いを口にできない者が、いかに恋する思いについて語るか、その洗練されたコトバの見本となっているのである。

2.5 フェニスとテッサラ（フェニス）(vv. 3119-3177)

次に取り上げるのは短い場面ではあるが、この作品のテーマが端的に表明されるところである。婚礼の祝宴の直前にフェニスは乳母テッサラに思いを打ち明ける。そして自分のかのイ

ズーと比べて次のように言う。

Ceste amors ne fu pas resnable, / Mes la moie iert toz jorz estbale, / Car de mon cors et de mon cuer / N'iert ja fet partie a nul fuer. / Ja mes cors n'iert voir garçoniers, / N'il n'i avra deus parçoniers. / Qui a le cuer, cil a le cors, / Toz les autres an met defors. [あの愛は理にかなったものではない、しかし私の愛はいつまでも変わらないでしょう、なぜなら私の体と私のこころとはいかなることがあっても決して分けられることはないでしょうから。けっして私の体は娼婦となることはないでしょうし、私の体を二人で分け合う人たちがいるようなこともないでしょう。こころを所有する人が体を所有するであって、私はその他の人たちはすべて除外するのです。] (vv. 3139-3145)

イズーはトリスタンを愛しながらも夫マルク王にも体を許した、自分はそのようになりたくないとフェニスは訴える。先の、アレクサンドルとソルダモールを前にしての王妃の言葉、愛する者どうしが互いに相手の「こころ」と「からだ」を所有する、という言葉をもとに、フェニスのこの「こころを所有する人が体を所有する」という言葉が理解される。フェニスはテッサラの用意した秘薬を花婿のアリスに飲ませることによってずっとアリスに体を与えないままに過ごすことになる。

「こころを所有する人が体を所有する」というのは、カトリックが定める一夫一婦制の原則であり、現代の少なからぬ日本人にとっても結婚や恋愛のルールと考えられている。しかし、考えてみれば、人間にとって「体」は自分の一つのものとして認知されやすいが、「こころ」もそうであろうかと問うことができるように思われる。“cuer”を、所有したり、他所へ置いたり、与えたりできるモノ、しかも一人に一つしかないモノと認知する（「心臓」のイメージが支えになっている）からこそ、このような表現、考え方が成立しているのではないかと。

2.6 フェニスのモノローグ (vv. 4396-4560)

ドイツでのフェニスとアリスの結婚の後、クリジェスはそのままブリタニアへ向かう前にフェニスのもとを訪れ、「私は正しくあなたさまにお暇乞いをするものであります、私がおの方のものであるそういうお方に対してするように」（“Mes droiz est qu'a vos congié praigne / Com a celi cui ge sui toz.” vv. 4312-4313）と言い残して去る。フェニスはクリジェスのことを思いながら夫アリスとともにコンスタンティノーブルへやって来る。語り手はフェニスの思いを次のように説明する。

Et ses cuers et ses esperiz / Est a Cligés, quel part qu'il tort, / Ne ja ne quiert qu'a li retort / Ses cuers, se cil ne li aporte / Qui muert del mal don il l'a morte ; [しかし彼女のこころと精神は、クリジェスのものである、彼がどこへ向かおうと。彼女は自分のこころが自分のもとへもどってくることを求めたりはしない、この病で彼女を死んだも同然にし、自分もその苦しみで死ぬほど苦しむその者がもたらすのでなければ。] (vv. 4332-4336)

ここで“esperit”（「精神」）の語が使われているのは音の数をそろえるためであろう。問題となるのは“cuer”だけである。彼女の“cuers”は一方でクリジェスの支配下にあるモノとして、他方では彼女自身から離れて旅するヒトとしてイメージされている。そしてここからフェニスが一人悩むモノログ、本作品で2番目に長いモノログとなる。

Morte sui, quant celui ne voi / Qui de mon cuer m'a desrobee, / Tant m'a losengiee et gabee. / Par sa lobe et par sa losenge / Mes cuers de son ostel s'estrengie, / Ne ne vialt o moi remenoir, / Tant het mon estre et mon menoir. / Par foi, donc m'a cil maubaillie / Qui mon cuer a en sa baillie, [私は死んでも同然、あれほど私におべっかと甘い言葉を使って、私から私のところを奪った方を目にするのがないのだから。あの方のほめ言葉とおべっかのために、私のところはその宿から離れてしまって、私のもとへ帰ることを望まない、それほど私という存在と私という館を嫌っている。誓って、私のところを管轄下に置いた方は私にひどい仕打ちをしたことになるのだわ、] (vv. 4443-4450)

ここで「“cuer”を奪われる」というのは、もはや単に何かに「ところを奪われる」というような慣用的な表現ではない。なにかのモノかヒトがイメージされている。そして先の語り手のコトバに符牒を合わせるように、“cuer”は“son ostel”（自分の住まい）、“s'estrangier”（異国へ旅する）、“remenoir”（帰国する）という語によって「旅するヒト」としてイメージされる。あるいはまた、“baillie”という語によって支配や所有の関係に置かれているヒトやモノとしてイメージされる。そしてフェニスは自分の“cuer”とともにクリジェスの“cuer”もイメージする。

Ja Cligés an nule seison / Ne m'esloignast, ce sai je bien, / Se ses cuers fut parauz au mien. / Mes parauz, fet el, n'est il mie. / Et s'a li miens pris conpaingnie / Au suen, ne ja n'en partira, / Ja li suens sanz le mien n'ira ; / Car li miens le siust en anblee : [クリジェスはいつであれ決して私を遠ざけることはなかったでしょう、わかっています、もし彼のところが私のものと似たものであったなら。でもまったく似ていないのです—と、彼女は言うのだった—。そして私のところは彼のところと道連れになったのです。私のところはそこから離れることはないでしょう、彼のところが私のところをおいてどこかへ行くことはないでしょう。なぜなら私のところはこっそり彼のところについていくのだから。] (vv. 4472-4479)

このようにフェニスは、「私の“cuer”と彼の“cuer”」、「私のものと彼のもの（“li mien et li sien”）」について、モノとして、ヒトとしてイメージし、「道連れ、同伴」（“compaignie”）する人間に喩えている。しかし、それら二つ、ないし二人は対等の関係にはない。

Car a la vérité retraire, / Ils sont molt divers et contraire. / Comant sont contraire et divers ? / Li suens est sire et li miens sers, / Et le sers maleoit gré suen / Doit feire au seignor tot son buen / Et lessier toz autres afeires. / A moi en chaut, lui n'en chalt gueires / De mon cuer ne

de mon servise. / Molt me poise ceste devise / Que li uns est sires des deus. [なぜなら本当のことを言えば、それら（私のところと彼のところ）はとても違っていて正反対のものだから。違っていて正反対とはどういうことですか。彼のところが主人で私のところが家来なのですから。家来は自分の意志とは無関係に主人にとってよいことをして、他のことはすべて置いておかないといけません。私には重要でも、彼にはほとんど重要でないのです、私のところや私の奉仕などというものは。二つのところのうち一方が他方の主人であるというこの状況が私をひどく苦しめる。] (vv. 4481-44891)

この引用の最後のところは要するに、「自分は彼を愛していても彼の方が私を愛しているのかわからないのでつらい」ということだが、“cuer” という語をもとにすればこのような洗練された、あるいは気取った表現となるという例である。そしてまた、遠く離れた異国へ行っているはずの自分の“cuer” について次のように言う。異国にいるクリジェスその人について語るのではなく。

Dex, que ne sont li cors si prés / Que je par aucune meniere / Ramenasse mon cuer arriere ! / Ramenasse ? Fole mauvaise, / Si l'ostroie de son eise, / Einsi le porroie tuer. / La soit ! Ja nel quier remuer, / Einz voel qu'a son seignor remaingne, / Tant que de lui pitiez li praigne ; Qu'ainçois devra il la que ci / De son sergent avoir merci, / Por ce qu'il sont an terre estrengne. [神よ、どうして私がかのの方法で私のところを連れ戻すことができるほど二つの体が近くにいないのでしょうか。連れ戻すですって。私はどうしようもないばかりだわ。私が私のところをその安らぎから追いやることがあれば、そのために殺してしまうことにもなりかねない。そこにいればいいのだ。連れ戻そうとはしないわ、主人のもとにとどまることを望みます。主人が私のところを憐れに思ってくれる限りは。主人の方はここでよりもあちらの方が、自分の家来に憐れみをもってくれるはず、主人と家来は異国の地にいるのだから。] (vv. 4500-4511)

自分の“cuer” についてこのように「異国にあってその主人の憐れみを得て主人に仕え、もはや私が連れ戻すことはできない」などと語る時、擬人アナロジーの表現レベルはこれまで以上に上がっている。そしていよいよ二人の再会の場面へと進むのである。

2.7 再会したクリジェスとフェニス (vv. 5162-5264)

クリジェスはフェニス忘れられずにブリタニアから久しぶりに帰国する。そのクリジェスにフェニスはかの地で奥方なり乙女なりを愛することはあったかとをたずねる。そこでクリジェスは次のような謎めいた返答をする。

« Dame, fet il, j'amai de la, / Mes n'amai rien qui de la fust. / Ausi com escorce sanz fust / Fu mes cors sanz cuer an Bretaingne. / Puis que je parti d'Alemaingne, / Ne soi que mes cuers se devint, / Mes que ça après vos s'an vint. / Ça fu mes cuers, et la mes cors. [奥方様—彼は言っ

た一、私はあちらで恋しました。しかしあちらの誰も恋していません。(中身の)材のない樹皮のように、ブリタニアにあって私の体にはころがありませんでした。私はアレマニア(ドイツ)を出立してから、私のころがどうなったの知りません、あなたの後についてこちらへ来たこと以外は、私のころはこちらにあり、私の体はあちらにあったのです。(クリジェスの言葉)] (vv. 5162-5169)

わざと誰に恋していたのか言わず、自分自身を中身(材)が空ろな樹皮にたとえる、つまり「樹皮」が「体」で「(内側)材」が「ころ」ということになる。そしてブリタニアにいたのは体だけの私であり、私の「ころ」はフェニスのいるコンスタンティノープルへ来ていたのだと言う。そしてフェニスの方も、クリジェスにコンスタンティノープルに来てどのような喜びを感じるがあったのかと問われて、この都市が気に入ることはなかったが、いま喜びが生まれたのだと、次のように続ける。

Por Pavie ne por Pleissance / Sachiez ne la voldroie perdre, / Car mon cuer n'en puis desaedre, / Ne je ne l'en ferai ja force. / En moi n'a mes fors que l'escorce, / Car sanz cuer vif et sanz cuer sui. / N'onques en Bretagne ne fui, / Et si a mes cuers sanz moi fet / An Bretagne ouan maint bon plet. [たとえパヴィアやピアチェンツァと引き換えでも私はそれ(喜び)を決して失いたくありません。なぜなら私は私のころをそれ(喜び)から引き離すことはできない、力づくでそれをそこから引き離すことはしないでしょう。私の内には樹皮しかないのです、というも私には生きたころがない、いやころというものがありません。私はブリタニアへ行ったことはありません、でも私のころは近頃私なしでブリタニアで楽しいことがあったのです。] (vv. 5184-5192)

フェニスもその喜びが、何によって、いや誰によってもたされたものかは明らかにすることなく、やはり自分を中身(材)が空ろな樹皮にたとえる。そして自分のころは自分から離れてブリタニアへ行っていたのだと言っている。そこから次のように二人は短い言葉のやりとりを経てついに互いに相手の自分に対する思いを確信するに至る。

Car je fusse molt deboneire / A vostre cuer, se lui pleüst / A venir la ou me seüst. / - Dame, certes, o vos vint il! / - O moi? N'ot il pas trop d'essil, / Qu'ausi rala li miens o vos. / - Dame, don sont ci avoec nos / Endui li cuer, si con vos dites; / Car li miens est vostres toz quites. / - Amis, et vos ravez le mien, / Si nos antravenomes bien. [なぜなら私はあなたのころに愛想よくしたでしょうから、もしあなたのころにわたしがいると知っているところへ来ていただけたなら。] — 「奥方さま、たしかにそれ(私のころ)はあなたのもとへ来たのです。」 — 「私のころへですって。ではあなたのころはそんな遠方への旅をしたわけではないのですね。私のころのがあなたのもとへ行ったほどには」 — 「奥方さま、つまり、ふたつのころはここに私たちとともにあるのです、おっしゃるように。なぜなら私のころはすべてあなたのもだからです。」 — 「あなた、あなたのほうは私のころを所有しているのです、こうして私たちは十分にわかりあえたのですね。」 (vv. 5208-5218)

二人のころはそれぞれの体を離れて旅をして相手のもとへ行っていた、それがこうして二人が再会したことによってそれぞれのころと体とが一つところに集まる。そしてそれぞれのころが相手のものであると確認される。かつて王妃がアレクサンドルとソルダモールを前にして確認したように。そして、やはり王妃が宣言したように、ここでは恋する者自身がころと体が相手のものであると言う。

Vostre est mes cuers, vostre est mes cors, / Ne ja nus par mon essanplaire / N'aprendra vilenie a faire ; / Car quant mes cuers an vos se mist, / Le cors vos dona et promet, / Si qu'autres ja part n'i avra. [私のころはあなたのもの、そして私の体もあなたのものです。誰も私を手本にしてつまらぬことを学ぼうなどとしてはいけません。なぜなら私のころがあなたのうちに行った時、体をあなたにわたした、約束したのです、他の人間がそこに手出しをすることがないように。] (vv. 5234-5239)

このように、“cuer”は一方で体の中にあって自分が所有している一つのモノ、他人に与えることもできるモノとしてイメージされ、また他方では自分から離れて愛するものところへ旅するヒトとしてイメージされている。クリジェスの言葉に、「分かっていたら私はあなたのころに対して愛想良くしていたでしょう」とあるように、擬人アナロジーの实在性のレベルはさらに上がっている。まだここではそのフェニスの“cuer”が物語に登場してクリジェスと話をするようなことはない。後の『薔薇物語』や『愛に燃えた心の書』では、夢という装置によってそれが可能になったのだと思われる。

ひとつの韻文物語のテキストをもとにした分析ながら、“cuer”という語の意味・イメージの多様性とそれをもとにした恋愛のコトバの性格を明らかにできたのではないかと思う。

“cuer”は、辞書の意味のレベルとしてはいわゆる「心臓」とそして「ころ」に相当するさまざまな意味で使われるが、その使い方、他のどのような語とどのように組み合わせられるかという点から、この語がどのようなモノとしてイメージされているかということもあきらかになる。もともと「心臓」という特別な体内の器官がもともになっているからであろう、やはり“cuer”はたいていは形のあるモノとしてイメージされる。どこかに「置く」とか、他人から「奪う」ことができるような。しかし「欲する」、「助言する」というように擬人アナロジーの表現でも使われる。これにも多様なレベルがある。

作者クレチヤンは恋のはじまりは愛の神がその矢を心臓にあてることからはじまるという古来からのモチーフによりながらも、“cuer”をもとにした恋愛のコトバを語り手に、そして登場人物たちに語らせている。しかも段階的に。まずアレクサンドルとソルダモール恋の物語では恋する者が自分の思いをいかに自分自身にコトバにすることができるか、その例が示されている。つぎのクリジェスとフェニスの恋の物語では恋する者が自分の思いをいかに相手にコトバで伝えるかという例が示されている。そしていずれの場合にも恋の成就すなわち結婚とは、

一人の相手との間で互いに体とところをあたえあう、そのことによって自分は相手のものとなり相手は自分のものとなることであるという理想が提示されている。

恋愛というものについて論じるコトバ、また恋愛感情を表現するコトバにおいても“cuer”は、一方で何か形あるモノとしてイメージされる。ランプの蠟燭、ステンドグラスから差し込む光、そしておそらく樹皮と材という、おそらく教会での説教などでもよく知られた喩えもそうであるが、だいたいは所有、譲渡、売買などの対象としてイメージされる。他方では人間として、つまり自分自身とは別の存在としてイメージされる。それも、まず敵味方、支配者と被支配者、封建的主従関係といった人間関係をもとにした静的な存在としてイメージされる。しかしまた、さらに自由に自分自身から離れて愛する人のもとへ旅する者としてイメージされる。

あらためてこうしたコトバのもとになっているのが「心臓」であると思うと、それがなにかほかのものであったらと考えるくなる。同じ内臓でも呼吸のもとになっている「肺」であったらどうであろうかと。あるいは「ところ」が形ある固まりではなくて、液体や気体のようなものであったらどうであろうかと。「心臓」が一つしかなく、分けられないからこそ、愛する「ところ」も複数の人間に分け与えられないのだろうか。それとも逆に愛する「ところ」が分けられないものだからこそ、ヨーロッパではずっと「ところ」は「心臓」にあるのだろうか。そしてこうした「心臓」と「ところ」の結びつきが、まさに西欧の伝統的な一つの恋愛・結婚観の支えになっているのだろうか。そこにはゾルターン・ケヴェチェシュが注目しているように、さまざまな文化を通じてのメタファーの普遍性と多様性の問題がある²⁸。本稿で試みたような分析が、日本文学、それも西洋文学やさらに漢字・漢語導入以前の日本語のテキストについて行われれば、興味深い比較ができるのではないと思われる。

キーワード：クレチヤン・ド・トロワ、メタファー、ところ

註

- 1 *Cligès*, Ed. Philippe Walter, in Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Gallimard, 1994, v. 5162-5264.
- 2 ジャン・フラビエは『クリジェス』の中のこうした会話を、17世紀文学の特徴として言われる「プレシオジテ」の用語を使って「宮廷風なプレシオジテ」(préciosité courtoise)と形容し、「中世の貴族層にとっては社交上の愛の会話の見本と思われたに違いない」と言っている。Jean Frappier, *Le roman breton, Chrétien de Troyes : Cligès*, “Les Cours de Sorbonne”, Centre de Documentation Universitaire, 1958, p. 27, p. 68.
- 3 たとえば有名なベルナット・デ・ヴェントドルンの「ひばり」の歌には、“tout m’a l cor”「彼女は私から心を奪い」という表現がある(瀬戸直彦編著『トルバドゥール詞華集』、大学書林、2002, pp. 36-37)。ジャンロワはトルバドゥール抒情詩の文体技法の「擬人表現」(personnifications)という点から「ところ」を取り上げ、さらに「目」と「ところ」が自分に逆らうというテーマについては『クリジェス』が最初であると言っている。Alfred Jeanroy, *La poésie lyrique des troubadours*, tome II, 1934, pp. 119-121.

- 4 「(愛の虜となった者は、甘言という餌で相手を引き寄せ、あらゆる努力を払い、) 目に見えない鎖で二つの心を結び合わそうとし (“instat duo diversa quodam incorporali viinculo corda unire”）」(『宮廷風恋愛について』、瀬谷幸男訳、南雲堂、1993, p. 14)
- 5 ウルガータ版「雅歌」4.9のはじめは “vulnerasti cor meum soror mea sponsa”、新共同訳(1990)では「わたしの妹、花嫁よ あなたはわたしの心をときめかす。」この部分、ヘブライ語をもとにした勝村弘也訳では「はくの妹、花嫁よ、君ははくの心をときめかす」としてあり、その「ときめかす」に「心臓(レーブ)から派生したと思われる動詞が、用いられているが、正確な意味は不明。」と注がついている。『旧約聖書 XIII ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記』、岩波書店、1998, p. 37. なお、古典ラテン文学では、「こころ」にあたる語としては “cor” よりも “animus” の方が多く使われるのではないと思われる。たとえば、“Illic saepe **animos** iuvenum rapuere puellae” (Ovidius, *Ars Amatoria*, I, v. 243-244), 「かかる時(宴席)には、往々にして女は青年の心を奪ってしまう。」(樋口勝彦訳『恋の技法』、1995, p. 21)
- 6 Ed. J.-J. Salverda de Grave, *Eneas*, 2 vols., 1968, 1973, Champion. 原野昇ほか訳『エネアス物語』 溪水社、2000.
- 7 René d'Anjou, *Le Livre du Cœur d'amour épris*, texte présenté, établi, traduit et annoté par Florence Boutet, Le Livre de Poche, 2003.
- 8 G. レイコフ・M. ジョンソン『レトリックと人生』、渡部昇一ほか訳、大修館書店、1986, pp. 78-81.
- 9 たとえば、「怒り」に関する表現について英語、ハンガリー語、中国語、そして日本語については松木啓子の研究を引用して比較している。Z. Kövecses, *Metaphor in Culture, Universality and Variation*, Cambridge University Press, 2005, pp. 194-200.
- 10 *Senefiance*, No. 30 (Le “cuer” au Moyen Age. Réalité et Senefiance), Publications du CUER MA, 1991. Begoña Aguiriano, “Le coeur dans Chrétien”.
- 11 ウォルター版の91例を行数で挙げると(カッコ内はミーシャ版行数) 249(245), 404(400), 409(407), 459(455), 473(470), 486(482), 505(499), 507(501), 618(612), 691(685), 699(693), 703(698), 710(704), 713(707), 714(708), 733(727), 744(741), 747(741), 753(747), 876(870), 882de(876), 886(880), 2110(2092), 2280(2258), 2316(2294), 2320(2298), 2328(2306), 2798(2776), 2799(2777), 2800(2778), 2803(2781), 2806(2784), 2808(2786), 2813(2791), 2821(2799), 2822(2800), 2824(2802), 2829(2807), 2836(2814), 2879(2857), 2885(2864), 2962(2940), 3135(3113), 3141(3119), 3145(3123), 3149(3127), 3538(3512), 3651(3625), 3682(3656), 3698(3672), 3812(3782), 3973(3943), 4006(3976), 4106(4076), 4156(4126), 4332(4302), 4335(4305), 4373(4343), 4374(4344), 4379(4349), 4443(4413), 4446(4416), 4450(4420), 4465(4435), 4474(4444), 4489(4459), 4495(4465), 4502(4472), 4549(4515), 4557(4523), 4752(4712), 5059(-)*, 5075(5035), 5089(5049), 5165(5121), 5167(5123), 5169(5125), 5171(5127), 5186(5142), 5189a(5145)**, 5189b(5145), 5191(5147), 5193(5149), 5209(5165), 5215(5171), 5234(5190), 5237(5193), 5655(5601), 5679(5625), 6218(6152), 6606(6502).
- * ヴァルテール版5059行は、校訂者ヴァルテールがBN fr. 794にはないのをBN fr. 1450から補ったもの。同じくBN fr. 794を底本とするミーシャ版にはない。“cuer”の例について2つの版で違うのはここだけ。
- ** ウォルター版5189行(ミーシャ版5145行)には一行に2例(“Car sanz cuer vif et sanz cuer sui”)。
- cf. *Les Romans de Chrétien de Troyes, II Cligés*, publié par Alexandre Micha, 1957. なおオリエラによってBN fr. 794をもとにしたクレチヤン作品のコンコーダンスが作成されているが、『クリジェス』についてはミーシャ版の行番号が採られている。Marie Louis Ollier et al., *Lexique et concordance de Chrétien de Troyes d'après la copie Guiot, avec introduction, index et rimaire*, J. Vrin, 1989.
- 12 “corage” の使用例は、14(14), 878(872), 1055(1049), 1104(1098), 1589(1575), 1647(1631), 1846(1828), 2293(2271), 2461(2439), 3107(3085), 3465(3441), 4143(4113), 4257(4227), 5056(5016). “ame” の使用例は 1771(1753), 1777(1759), 3716(3690), 4178(4148), 5441(5393), 5738(5684), 5745(5691), 5796(5742), 5876(5820). “esperit” の使用例は4332(4302), 5642(5588).
- 13 たとえば、“Et l'ame prant congié au cors,” 「そこで魂は肉体に別れを告げ、」(v. 1777).
- 14 ただ武勲詩でもあらためて調べると、意外に心臓を刺されて死ぬ例はそう多くない、『ロランの歌』でも

- 1 個所だけということである。Isabelle Weill, “Les syntagmes du cœur dans la geste des Lorrains”, *Senefiance*, No. 30, 1991, pp. 461-470.
- 15 Georges Matoré, *Le vocabulaire et la société médiévale*, 1985, p. 123.
- 16 Danielle Régner-Bohler et Claude Gaignebet, *Le Cœur mangé : Récits érotiques et courtois des XII^e et XIII^e siècles*, 1979.
- 17 小池寿子『内臓の発見 西洋美術における身体とイメージ』、筑摩選書、2011, pp. 232-237.
- 18 金田一春彦『日本語 新版(上)』、岩波新書、1988, p. 184. また、欧米人は牛や豚を食べたので牛豚の目立つ内臓を区別して名前をつけてそれを人間に応用したのに対して、魚しか食べなかった日本人は魚の内臓としては「肝臓」と「腸」しか区別しなかったとも指摘している。
- 19 古代歌謡の一つに「肝向かふ心をだにか相思はずあらむ」とあるところ(古事記編60)、土橋寛著『古代歌謡全注釈』(角川書店 第8版、1987, pp. 247-249)によれば、「肝向かふ」は「心」の枕詞であり、また「キモ」は内臓の汎称とのことで、精神を内臓で表す言葉であらわしているのだという。
- 20 Kövecses, *The Language of Love*, 1988, p. 43.
- 21 中村明『日本語レトリックの体系』、岩波書店、1991, pp. 281-288.
- 22 擬人表現のさまざまなタイプについて、欧米語も日本語(訳語もふくめて)も用語の区別が曖昧であるように思われる。「花笑い鳥歌う」のような場合、日本語で「擬人法」という。また“La peur me saisit.”「恐怖が私を捉えた」のような場合に“abstractum agens”という語が使われる。わかりにくいのは、『薔薇物語』の「理性」のように、物語に登場して語る場合で、技法として、あるいはそのひとつひとつをどのような語で呼ばばいいのか(単なる「擬人法」などと区別して)、定まったものがないように思われる。ジャンロワ(前掲書)やストリューベルは“personnifications”の用語を使っているが、クルティウスでは“Personalmetaphern”。また一般に(とくに美術史では)“allégorie (allegory)”の語も使われる。Armand Strubel, *La Rose, Renart et le Graal, Slatkine*, 1989. Ernst Robert Curtius, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Zweite Auflage, 1954, p. 141.
- 23 なお、まだドイツでのこと、誘拐されかけたフェニスをクリジェスが救出し、二人だけで馬で自軍へ戻る場面、語り手が長々と二人の気持ち、さらにおよそ恋する者の気持ちについて語っているが、そこでは“cuer”の語は使われていないので、ここではとりあげない(vv. 3803-3898)。
- 24 “Il me navra an un esgart, / en l'oïl me feri de son dart, / de celui d'or, qui fet amer ; / tot le me fist el cuer coler.” (Ed. Salverda de Grave, vv. 8159-8162)「一目見ただけで愛の神にやられてしまった。／投げ矢を、恋をさせる金の投げ矢を／私の目に命中させた。／ぐざりと心臓にまで届いたわ。」(原野ほか訳、前掲書、p. 205)
- 25 ガリマール版の校訂者ヴァルターは注で、G. Favatiの1967年の論文をとりあげた上で、「視覚についての中世の理論は(外界の)、事物から眼への動きと眼から事物への動きという2つの互いに反対方向の2つの動きの出会いを想定していた」としているが、Favati論文についてはその後に批判した論文も出ていて、この問題のはっきりした結論はまだ出ていないのではないと思われる(Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, p. 1143)。Claude Luttrell, “The Heart’s Mirror in Cligés”, in *Arthurian Literature*, v. 13, 1981, pp. 1-13. また同じ現代語訳でもメラとコレによるものでは“li sens”は“le sentiment”と訳されている(Chrétien de Troyes, *Romans, La Pochotèque*, 1994, p. 311)。なお、中世の視覚理論については、市場泰男『夢か科学か妄説か 古代中世の自然観』(平凡社、1987)第5章「物はなぜ見えるのか——古代中世の視覚論争」で諸理論が紹介されている。
- 26 『ランプの賦』のアレゴリーの原理についてはストリューベルが説明している。Armand Strubel, *La Rose, Renart et le Graal, Slatkine*, 1989, pp. 152-153.
- 27 Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, p. 1150.
- 28 Z. Kövecses, *Metaphor in Culture*, pp. 139-181.

AbstractLe “cuer” dans le *Cligès*

Hiroshi UEDA

Comment peut-on parler de l'amour ? Chrétien de Troyes, romancier français du 12^e siècle, répond à cette question avec le mot “cuer” (cœur) dans le *Cligès*. Nous examinons, d'abord, les différents emplois du mot “cuer” et de son dérive “corage” dans ce roman : sens lexicologiques, fonctions syntaxiques, métaphores conceptuelles, personnifications. Ensuite nous analysons les significations particulières du “cuer” dans les discours sur l'amour des amants et du narrateur. Le “cuer” peut être une chose solide, indivisible et aliénable, que l'on peut déposer, vendre ou voler. Le “cuer” se montre aussi comme un être humain, ami ou ennemi, sergent fidèle ou libre révolté, qui peut quitter son maître et voyager au loin pour accompagner sa personne aimée. On ne possède qu'un seul “cuer” indivisible, organe physique invisible et perceptible. Le langage amoureux fondé sur le “cuer” (“Qui a le cuer, cil a le cors”) reflète-t-il le principe de la monogamie ou, l'inverse, celui-ci provient du “cuer” chez les occidentaux ?

Keywords: Chrétien de Troyes, metaphor, heart